

# スタートアップ総合支援プログラム (SBIR 支援)

令和4年度 公募要領

公募期間

令和4年6月13日（月） ～ 令和4年7月14日（木）12:00

生物系特定産業技術研究支援センター



## <目次>

<b>1</b>	<b>スタートアップ総合支援プログラム（SBIR 支援）について</b>	<b>4</b>
	(1) 背景と目的	4
	(2) 新たな中小企業技術革新制度（SBIR 制度）	4
	(3) 本プログラムの特徴	5
	(4) 令和 4 年度研究課題公募について	6
<b>2</b>	<b>公募内容</b>	<b>8</b>
	(1) 研究開発テーマ	8
	(2) 各フェーズの詳細	9
<b>3</b>	<b>応募要件等</b>	<b>13</b>
	(1) 応募者の要件	13
	(2) 複数の研究機関で応募する場合の要件	14
	(3) 研究管理運営機関を設置できる要件	15
	(4) 研究の実施体制	15
<b>4</b>	<b>応募手続き</b>	<b>16</b>
	(1) 応募方法	16
	(2) 受付期間	17
	(3) 応募書類	17
	(4) 応募手続きに関する注意事項	17
<b>5</b>	<b>応募に当たっての注意事項</b>	<b>18</b>
	(1) 不合理な重複及び過度の集中の排除	18
	(2) 研究倫理に関する対応	20
	(3) 個人情報の取扱い	20
	(4) 農研機構に所属する研究機関が参画する場合の支出	21
<b>6</b>	<b>審査及び採択課題の決定</b>	<b>21</b>
	(1) 審査の方法	21
	(2) 審査の観点	21
	(3) 加点要素（フェーズ 0 のみ）	22
	(4) 採択課題の通知・公表	22
	(5) 審査等に関する留意事項	22
	(6) 公募から委託契約までの流れ（予定）	22
<b>7</b>	<b>委託契約の締結</b>	<b>23</b>
	(1) 委託契約の締結	23
	(2) 委託期間	23
	(3) 翌年度以降の取扱い	23
	(4) 実績報告について	23
<b>8</b>	<b>委託契約上支払対象となる経費</b>	<b>23</b>
	(1) 直接経費	24
	(2) 間接経費	24
	(3) 一般管理費（研究管理運営機関に限る）	24
	(4) 委託費計上に当たっての留意事項	24
<b>9</b>	<b>研究成果の評価等</b>	<b>25</b>
	(1) 研究成果報告書	25
	(2) 研究成果の評価等	25
	(3) 本プログラム終了後における報告への協力	26
	(4) 研究終了後のフォローアップ調査（追跡調査）	26
<b>10</b>	<b>研究成果の取扱い</b>	<b>26</b>
	(1) 研究成果の発表等	26
	(2) 知的財産マネジメント	26
	(3) 研究成果に係る知的財産権の帰属	27
	(4) 知的財産権以外の研究成果の取扱い	27

(5) 研究成果の管理 .....	28
(6) 研究成果に係る秘密の保持 .....	28
(7) 農業者等が参画する場合の農業者等に関する情報の取扱い .....	28
<b>1 1 本プログラムの運営管理体制 .....</b>	<b>29</b>
(1) プログラムディレクター (PD) .....	29
(2) プログラムマネージャー (PM) .....	29
(3) 評議委員会 .....	29
(4) 運営管理委員会 .....	29
<b>1 2 研究費の不正使用及び不正受給並びに研究活動における不正行為防止等 .....</b>	<b>29</b>
(1) 研究費の不正使用等への対応について .....	29
(2) 不正使用等が行われた場合の措置 .....	30
(3) 虚偽の申請に対する対応 .....	31
(4) 研究活動における不正行為への対応について .....	31
(5) 不正行為が行われた場合の措置 .....	32
(6) 指名停止を受けた場合の取扱い .....	32
(7) 研究費の不正使用及び不正受給並びに研究活動における不正行為防止のための取組について .....	32
<b>1 3 情報管理の適正化 .....</b>	<b>33</b>
(1) 本プログラムの実施体制 .....	33
(2) 情報保全 .....	33
(3) 応募者に要求される事項 .....	33
<b>1 4 委託業務の実施に当たっての留意事項 .....</b>	<b>34</b>
(1) 購入機器等の帰属及び管理 .....	34
(2) 安全保障貿易管理について (海外への技術漏洩への対処) .....	34
(3) 動物実験等に関する対応 .....	36
(4) 海外の遺伝資源の取得・利用等を含む研究に関する対応 .....	36
(5) 農業者等からデータを受領・保管する際の取り決めについて .....	36
(6) データマネジメントに関する対応 .....	37
(7) 若手研究者の自発的な研究活動の支援 .....	37
(8) エフォート管理の統一 .....	37
(9) 複数の研究費制度による共用設備の購入 (合算使用) .....	38
(10) 競争的研究費の直接経費から研究代表者等 (P I) の人件費の支出 .....	38
(11) 競争的研究費の直接経費から研究以外の業務の代行に係る経費を支出可能とする見直し (パイアウト制度の導入) .....	39
(12) 競争的研究費における R A 経費等の適正な支出の促進について .....	39
<b>1 5 その他の留意事項 .....</b>	<b>39</b>
(1) 利益相反・責務相反に関する規定の整備 .....	39
(2) 「国民との科学・技術対話」の推進 .....	40
<b>1 6 問合せ先 .....</b>	<b>40</b>

別紙 1 府省共通研究開発管理システム (e-Rad) による応募手続きについて

別紙 2 契約等の手続きについて

別紙 3 府省共通経費取扱区分表

別紙 4 研究費の適切な使用に向けた決意表明

別紙 5 調達における情報セキュリティ基準

別紙 6 調達における情報セキュリティの確保に関する特約事項

別紙 7 契約ガイドラインチェックリスト

別紙 8 データマネジメント方針

別添 提案書様式

## 1 スタートアップ総合支援プログラム（SBIR 支援）について

### （1）背景と目的

我が国の農林水産業・食品産業は、国民生活に必要な不可欠な食料の供給や国土保全等の多面的機能を有するだけでなく、地域の多彩な食文化を支える高品質な農産物・食品や農村固有の美しい景観・豊かな伝統文化などは我が国の魅力の一つとして国内外での評価を高めています。また、農業・食料関連産業の国内総生産は全経済活動の1割に相当し、我が国経済の中で重要な地位を占めています。

農林漁業者や農村人口の著しい高齢化・減少、これに伴う農地面積の減少など、農業の生産基盤が損なわれ地域コミュニティの衰退が一層進むことが懸念されるなか、大規模災害、野生鳥獣害、家畜疾病等、我が国の食料生産や農業現場に深刻な影響を及ぼす要因に対処しながら、我が国の人口構造の変化に伴う食料需要の変化や、世界的な人口増加による食料危機に的確に備えていく必要があります。

これらの課題のなかで、我が国の農林水産業・食品産業の競争力を強化し飛躍的に成長させていくためには、革新的な技術・商品・サービスを社会に普及することが必要不可欠となっており、とくに、政策的・社会的な課題の解決を図るには、研究開発の成果の事業化とその成長を目指すスタートアップ等に大きな期待が寄せられています。

生物系特定産業技術研究支援センター（以下「生研支援センター」という。）のスタートアップ総合支援プログラム（SBIR 支援）は、中小企業技術革新制度（新 SBIR 制度）における指定補助金等の研究委託事業として、革新的な研究開発を行う研究開発型スタートアップ等による技術の事業化を支援し、農林水産業・食品産業の政策的・社会的な課題の解決を図るとともに、我が国のイノベーション創出を促進することを目的としています。

### （2）新たな中小企業技術革新制度（SBIR 制度）

新たな中小企業技術革新制度（SBIR 制度）は、スタートアップ等による研究開発を促進し、その成果を円滑に社会実装することによって我が国のイノベーション創出を促進することを目的とした制度です。

令和3年度から新たに科学技術・イノベーション創出の活性化に関する法律（平成20年法律第63号。以下「活性化法」という。）の下で、国の機関から研究開発型スタートアップ等への補助金や委託費の支出機会の増大を図る（支出目標の設定）こととされ、このうち活性化法第2条第16項に規定する指定補助金等は、イノベーションを生み出すポテンシャルを有しながらも強い資金的な制約に直面する研究開発型スタートアップに補助金等を交付することで、いわゆる「死の谷」を超えて科学技術の実用化・事業化の実現を可能にする役割・位置づけとされています。

運用面においては、指定補助金等の交付等に関する指針について（令和4年6月3日閣議決定）において、①各府省等が社会ニーズ・政策課題に基づく研究開発課題をスタートアップ等に適した形で設定、②実現可能性調査（FS：Feasibility study）段階から、幅広く支援を開始し、ステージゲート方式を通して、事業化・成長可能性の高い研究開発シーズを選抜し、連続的に支援を実施、③プログラムマネージャーによる運営管理、調達・民生利用への繋ぎ等の支援、④スタートアップ等に適した運用、審査基準、体制の標準化など

を検討、等の公募・執行に関する統一的な運用と社会実装の促進が図られています。

なお、本プログラムは、指定補助金等の対象事業として、上記の統一的な運用を踏まえて実施します。

(参考) SBIR 制度に関する情報は以下ウェブサイトをご参照ください。

<https://sbir.smrj.go.jp/index.html>

### (3) 本プログラムの特徴

#### ① 農林水産・食品分野における新たなビジネス創出を目指す

本プログラムでは、農林水産業・食品産業に関わる政策的・社会的な課題の解決に資する研究開発テーマを設定して、革新的な研究開発に取り組むスタートアップ等(起業前の研究者を含む)が事業化を目指して取り組む研究課題を募集し、研究開発及び事業化の取組を支援するプログラムです。

#### ② 段階的な支援

技術シーズの確立から事業化まで4つのフェーズ(フェーズ0、1、2及び3)を設定し、事業化に関する知見や経験が豊富なプログラムマネージャーの支援を受けながら、フェーズ毎に設定する目標を点検しながら研究開発と事業化を進めることを可能としています。本プログラムの全体像は7頁をご参照ください。

フェーズ0(発想段階)：事業化が有望な技術シーズを創出する創発的研究を実施。

フェーズ1(構想段階)：研究開発成果の事業化に向けて、科学技術的な実現可能性や技術的又は商業的な潜在性を判断するための概念実証(Proof of Concept, PoC)や実現可能性調査(Feasibility Study, F/S)を行い有望な事業モデルを構築。

フェーズ2(実用化段階)：PoCやF/Sを踏まえた事業化に向けた研究開発と、事業を開始するための体制構築、事業計画策定、資金調達等を実施。

フェーズ3(事業化段階)：事業を開始し、スケールアップに向けた取組。

#### ③ シームレスによるフェーズの移行

本プログラムでは、実施する研究課題について、フェーズ毎に設定する達成目標をクリアし、かつその成果が優れているもののうち、将来的な事業化が特に有望と見込まれる場合は、公募プロセスを介さずに上位フェーズへ移行できるシームレスの仕組みを導入しています。

#### ④ プログラムマネージャー(PM)による事業化支援

本プログラムでは、事業化に関する知見や経験を豊富に有する者をプログラムマネージャー(PM)として配置し、採択する研究課題の事業化をサポートします。

PMは、各研究課題が取り組むフェーズや研究開発や事業化に向けた取組に応じて、主として以下の事業化支援を予定しています。

▶メンタリング

研究課題に応じて、メンターや経営人材候補等から構成されるメンターチームを編成し、PoC、F/S、市場調査、知財調査、マーケティングなど、事業モデルや知財戦略を構築するための取組に関する助言、起業や事業展開に関する助言等を受けることができます。

▶事業化に関連するセミナー

起業、資金調達、マーケティング等、事業化に役立つセミナーを開催します。

▶企業等とのマッチング

事業化に向けて必要となる技術連携、事業会社との連携、資金調達の機会など、企業、研究機関、金融機関（VC等）とのマッチングの機会を提供します。

▶ピッチコンテストへの出場支援

企業や投資家を対象とする事業構想等のピッチ機会の提供や、発表に向けた支援を行います。

▶その他、海外事業展開やインキュベーション施設の活用などについても、必要に応じて支援を行います。

#### （４）令和４年度研究課題公募について

本公募では、農林水産・食品分野における新たなビジネス創出を目指して研究開発に取り組んでいるスタートアップ等（起業前の研究者を含む）を対象に、事業化に向けた革新的な研究開発（研究課題）を募集します。

応募者は、２（１）の本公募の募集対象となる研究開発テーマ及び２（２）の各フェーズの提案要件等をよく確認し、提案する研究課題が最も適合する研究開発テーマやフェーズを選択して応募してください（採択審査の結果、選択するフェーズと異なるフェーズでの実施を指導する場合があります）。

※ 令和３年度に国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）「大学発新事業創出プログラム（START）プロジェクト推進型 SBIR フェーズ１支援」の採択を受けた応募者にあつては、フェーズ２を選択して応募してください。

その他、本プログラムは、自然科学系の研究・技術の開発を主体的に行う研究課題を対象としており、以下のような研究課題は応募の対象とはなりません。仮にこのような研究課題が応募された場合は、審査の対象から除外されることとなりますのでご注意ください。

- ・社会科学系研究を主として行う研究課題
- ・農林水産業・食品産業の発展に寄与しない研究課題
- ・応募主体が事業化又は起業を目的としない研究課題 等

# スタートアップ総合支援プログラム（SBIR支援）の全体図

スタートアップ  
フェーズ0  
フェーズ1  
フェーズ2  
フェーズ3

（発想段階） → （構想段階） → （実用化段階） → （事業化段階）

研究開発テーマ	農林水産業・食品産業に関連する政策的・社会的課題の解決に資するテーマを設定		
対象	研究開発の事業化に取り組むスタートアップ企業、事業化を目指す研究者（応募は所属機関）等		
期間	2年以内	1年以内	1年以内
研究委託費	1,000万円/年以内	1,000万円/年以内	VC等からの出資額と同額以内（上限3,000万円/年）
研究（取組み）内容	技術シーズの創出	PoC、F/S	事業の開始、スケールアップに向けた技術改良
目標	事業化に有望な技術シーズの確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>技術的課題の明確化</li> <li>有望な事業モデル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>法人化</li> <li>具体的な事業計画</li> <li>VC等からの出資調達</li> </ul>

経験豊富なプログラムマネージャー（PM）が課題に応じて事業化をサポート

伴走支援

メンタリング

セミナー

企業マッチング

資金調達マッチング

展示会出展

メンタリングにおける支援例（想定）

- 技術改良の助言
- 事業化を意識した技術的な助言
- 知財戦略の助言 等
- 技術改良の助言
- PoC、F/S、市場調査
- マーケティング調査の支援
- 事業モデル構築支援 等
- 技術改良の助言
- 経営人材マッチング
- 知財調査、資金調達の支援
- 事業計画策定支援 等
- 技術改良の助言
- 設備投資、市場開拓など
- 事業開始準備の助言 等

本プログラムで受けられる事業化支援

## 2 公募内容

### (1) 研究開発テーマ

本公募で研究課題を募集する研究開発テーマは以下のとおりです。

	研究開発テーマ	要望する研究開発の例
1	<b>農林漁業者の高齢化や担い手不足等、生産現場の課題解消</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>データ及びアプリケーション連携による生産性の大幅な向上</li><li>作業の自動化・電動化・省力化・高精度化・低コスト化・効率化並びにそれらのシェアリングサービスによる人手不足の解消</li><li>農山漁村のインフラ、街づくりの維持・発展</li></ul>
2	<b>農林水産物の加工・流通の合理化・迅速化</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>需給データ連携や異業種で進展している無人販売など新たな販売システムにより、生産地から店頭までのリードタイム短縮や鮮度維持、食品ロス削減、物流コスト削減</li><li>農林水産物の持つストーリー性等を消費者につなぐことによる付加価値の向上</li><li>食品・加工・外食産業における温室効果ガスの削減</li></ul>
3	<b>農林水産物の可能性の拡大と成長の推進</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>ゲノム技術による育種や発酵・微生物、生産技術の輸出プラットフォームなど、先端技術やノウハウを活用した農業の発展・食料安全保障への寄与</li><li>国産農林水産物の安定供給・拡大と需要の拡大</li></ul>
4	<b>農林水産物の高い生産性と持続可能性の両立の実現</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>持続可能な農林水産業に資する燃料生産技術や発電技術、VEMS等の事業化に向けた研究開発</li><li>持続可能性の高い肥料やバイオスティミュラント、農薬の研究開発</li><li>カーボンニュートラルの実現に資する研究開発</li></ul>

## (2) 各フェーズの詳細

### フェーズ0 (発想段階)

#### ①フェーズ0について

農林水産・食品分野における政策的・社会的な課題の解決に資する新たなビジネス創出に必要な技術シーズの創出に取り組みます。

また、技術シーズの革新性や優位性を明確にするための知財調査を行うなど、事業化に関するビジョンを明確にして事業化までのマイルストーン構築等に取り組みます。

#### ②フェーズ0の達成目標 (評価指標)

ア 技術シーズの確立 (実験室レベルの実証試験を踏まえていることが望ましい。事業化に関する実現可能性調査 (F/S) や概念実証 (PoC) を実施できるレベル。)

イ コア技術に関する知財戦略の設定

ウ 対象となる魅力的な市場の選定と深掘り

エ 事業化に向けたマイルストーンの構築 (PoC、F/S、法人立上げ、事業開始、資金調達、スケールアップなど)

#### ③提案内容の要件

ア 成果の事業化を目指す研究開発であること

イ 2 (1) に記載するいずれかの研究開発テーマに合致する内容であること

ウ 研究開発はまだ事業化されていない内容であること

#### ④研究実施期間

2年以内 (令和4年度末又は令和5年度末まで)

※ 1年度終了時に研究開発や事業化に向けた取組に関する評価を行い、評価結果を踏まえて、上位フェーズへの移行、研究計画の終了等の措置を行う場合があります。

#### ⑤研究開発費 (間接経費を含めた上限額)

1,000万円以内/年度

## フェーズ1（構想段階）

### ①フェーズ1について

事業化に向けた構想段階として、概念実証（Proof of Concept）や事業化に関する実行可能性調査（Feasibility Study, F/S）に取り組みながら、技術改良等の研究開発や有望な事業モデルの構築に取り組むとともに、知財調査等を通じて知財戦略を確立します。

### ②フェーズ1の達成目標（評価指標）

- ア F/S、PoC を通して事業化に必要な技術的課題の明確化
- イ F/S、PoC を通して有望な事業モデル（ビジネスシステムと収益モデル）の構築
- ウ 事業モデルを踏まえた知財戦略の確立
- エ 成長性が期待できる市場とその規模の把握

### ③提案内容の要件

- ア 成果の事業化を目指す研究開発であること
- イ 2（1）に記載するいずれかの研究開発テーマに合致する内容であること
- ウ 研究開発はまだ事業化されていない内容であること
- エ 以下フェーズ0の達成目標を達成していること
  - 1) 技術シーズの確立（実験室レベルの実証試験を踏まえていることが望ましい。事業化に関する実現可能性調査（F/S）や概念実証（PoC）を実施できるレベル。）
  - 2) コア技術に関する知財戦略の設定
  - 3) 対象となる魅力的な市場の選定と深掘り
  - 4) 事業化に向けた各ステージ（PoC、FS、法人立上げ、事業開始、資金調達、スケールアップなど）のマイルストーンの構築（5年程度）

### ④研究実施期間

1年以内（令和5年6月末まで）

### ⑤研究開発費（間接経費を含めた上限額）

1,000万円以内

## フェーズ2（実用化段階）

### ①フェーズ2について

事業化に向けた実用化段階として、PoC や F/S を踏まえて構築したビジネスモデルの実現に向けて、研究開発（技術改良）や、事業の実施に向けて体制整備（法人化を含む）、具体的な事業計画の構築、VC 等から資金調達（出資を得る）に取り組みます。

### ②フェーズ2の達成目標（評価指標）

- ア 事業の開始に必要な技術改良の達成
- イ 事業実施体制（法人設立を含む）の整備
- ウ 具体的な事業化計画の策定
- エ 具体的な顧客の選定
- オ ベンチャーキャピタル等（以下「VC 等」という。）からの出資の獲得

### ③提案内容の要件

- ア 成果の事業化を目指す研究開発であること
- イ 2（1）に記載するいずれかの研究開発テーマに合致する内容であること
- ウ 研究開発はまだ事業化されていない内容であること
- エ 以下フェーズ1の達成目標を達成していること
  - 1) F/S、PoC を通して事業化に必要な技術的課題の明確化
  - 2) F/S、PoC を通して有望な事業モデル（ビジネスシステムと収益モデル）の構築
  - 3) 事業モデルを踏まえた知財戦略の確立
  - 4) 成長性が期待できる市場とその規模の把握

### ④研究実施期間

2年以内（令和4年度末又は令和5年度末まで）

※1年度終了時に研究開発や事業化に向けた取組に関する評価を行い、評価結果を踏まえて、上位フェーズへの移行、研究計画の終了等の措置を行う場合があります。

### ⑤研究開発費（間接経費を含めた上限額）

1,000万円／年度

## フェーズ3（事業化段階）

### ①フェーズ3について

事業化段階として、新たな事業を開始し、スケールアップなど事業の拡大に向けた技術改良等を実施します。

なお、フェーズ3（事業化段階）については、原則として、創業初期における事業の開始又はスケールアップに向けた研究開発を支援対象としますので、応募者の要件をよくご確認ください。

### ②フェーズ3の達成目標（評価指標）

- ア 事業の拡大に必要な技術開発（改良）の達成
- イ 事業の開始、事業規模の拡大（生産効率、生産規模、新たな事業展開、顧客の拡大等）

### ③提案内容の要件

- ア 成果の事業化を目指す研究開発であること
- イ 2（1）に記載するいずれかの研究開発テーマに合致する内容であること
- ウ 研究開発はまだ事業化されていない内容であること
- エ 以下フェーズ2の達成目標を達成していること
  - 1) 事業の開始に必要な技術改良の達成
  - 2) 事業実施体制（法人設立を含む）の整備
  - 3) 具体的な事業化計画の策定
  - 4) 具体的な顧客の選定
  - 5) VC等からの出資の獲得（※）

### ④研究実施期間

1年以内（最長で令和5年6月末まで）

### ⑤研究開発費（間接経費を含めた上限額）

VC等からの出資（※）を受けている金額と同額以内  
ただし、3,000万円を上限とする

※ VC等からの出資とは、原則として、一般的な株式の引き換えによるVCやCVC等からの出資を指します。

### 3 応募要件等

#### (1) 応募者の要件

本プログラムの応募者（代表機関。以下同じ。）は、研究開発成果を事業化するスタートアップ等の事業者又は事業化を目指す研究者が研究代表者となる場合はその所属機関であることとし、以下①から⑦までの要件を満たす必要があります。

① 法人格を有する者であって、応募フェーズに応じた要件に適合すること。

##### 【フェーズ0、1又は2の応募者】

次のア又はイに該当すること。

ア 日本に登録されている中小企業者（※1）であること（ただし、みなし大企業は除く）

イ 国公立大学、大学共同利用機関法人、国公立高等専門学校、独立行政法人（国立研究開発法人等）、地方独立行政法人、公設試験研究機関、公益・一般法人、NPO法人、共同組合のいずれかであること。ただし、研究代表者が起業して事業化を目指しているものに限る

##### 【フェーズ3の応募者】

次のウからオまでに該当すること。

ウ 日本に登録されている中小企業者（※1）であること（ただし、みなし大企業は除く）

エ シード・アーリーステージのスタートアップ企業であり、VC等からの出資を受けていること

オ 提案内容が主たる事業内容に係る研究開発であること

（※1）中小企業者とは、科学技術・イノベーションの創出の活性化に関する法律（平成20年法律第63号）第2条第14項に規定する以下に示す「資本金基準」又は「従業員基準」のいずれかの基準を満たす企業であって、みなし大企業に該当しないものをいいます。

主たる事業として営んでいる業種	資本金基準 (資本金の額又は出資の総額)	従業員基準 (常時使用する従業員の数)
製造業、建設業、運輸業及びその他の業種（下記以外）	3億円以下	300人以下
ゴム製品製造業（自動車又は航空機用タイヤ及びチューブ製造業並びに工業用ベルト製造業を除く。）	3億円以下	900人以下
小売業	5千万円以下	50人以下
サービス業（下記3業種を除く）	5千万円以下	100人以下
ソフトウェア業又は情報処理 サービス業	3億円以下	300人以下

旅館業	5 千万円以下	200 人以下
卸売業	1 億円以下	100 人以下

本プログラムで「みなし大企業」とは、以下のいずれかに該当する中小企業者をいいます。

- 発行済株式の総数又は出資の総額の2分の1以上が同一の大企業（注）の所有に属している企業。
  - 発行済株式の総数又は出資の総額の3分の2以上が、複数の大企業（注）の所有に属している企業。
  - 資本金又は出資金が5億円以上の法人に直接又は間接に100%の株式を保有されている企業。
- （注）「大企業」とは、事業を営むもののうち、中小企業者を除くものをいいます。

- ② 主たる研究開発及び意思決定のための拠点を日本国内に有すること。
- ③ 研究実施に必要な以下の体制及び能力を有する機関（研究機関）であること。
  - ア 研究開発を円滑に実施するための研究体制、研究員、設備等を有する
  - イ 知的財産等に係る事務管理等を行う能力・体制を有する
  - ウ 委託事業費の執行に係る区分経理処理など、適正な執行管理体制及び処理能力を有する
  - エ 研究成果の普及、共同研究機関等との連絡調整等、コーディネート業務を円滑に行う能力・体制を有する
  - オ 生研支援センターとの委託契約を締結できる能力・体制を有する
- ④ 委託契約の締結に当たり、生研支援センターが提示する委託契約書に合意できること。
- ⑤ 本プログラムに関わる者に関して、前職の離職時に前職と結んだ念書・誓約書等の制限条項に抵触していないこと。
- ⑥ 反社会的勢力、あるいはそれに関わる者との関与がないこと。
- ⑦ 令和4・5・6年農林水産省競争参加資格（全省庁統一資格）の「役務の提供等（調査・研究）」の区分の有資格者であること。

提案書提出時に未取得の者も応募可能ですが、委託契約までに取得できない場合は、採択を取り消しますので、速やかに申請してください。

（参考）統一資格審査申請・調達情報検索サイト

<https://www.chotatujoho.geps.go.jp/va/com/ShikakuTop.html>

## （2）複数の研究機関で応募する場合の要件

委託事業は直接採択方式であり、公募研究課題の一部又は全部を受託者が他の研究機関等に再委託することはできません。

このため、本プログラムでは、研究開発成果の事業化の主体となる者を代表機関、共同研究に参画する者を共同研究機関として、複数の研究機関等がグループを組んで応募することを可能としています。この場合、当該グループは以下のすべての要件を満たすとともに、参画する研究機関（代表機関及び共同研究機関）の分担関係を明確にしてください。

- ① 研究グループを組織して共同研究を行うことについて、研究グループに参画するすべての機関が同意していること。
- ② 共同研究機関は、3（1）の①から⑥までの要件を満たすこと。

③ 研究グループと生研支援センターが契約を締結するまでの間に、以下のいずれかの方法により研究グループを構築すること。（委託予定先に採択された場合に速やかにコンソーシアム設立規約等の必要書類を提出できるよう、準備を進めてください。）なお、採択後、契約締結までの間に、当該研究グループ構成の変更等重大な変更があった場合には、採択を取り消します。

ア 実施予定の研究課題に関する規約の策定（規約方式）

イ 研究参加機関が相互に実施予定の研究課題に関する協定書の締結（協定書方式）

ウ 共同研究契約の締結（共同研究方式）

④ 研究グループに参画するすべての機関は、本プログラムによる研究開発成果について、代表機関たる中小企業者又は研究代表者が新たに設立する法人が事業化することについて、特許権等の帰属や独占的な実施権の設定を含め、了解していること。

### （３）研究管理運営機関を設置できる要件

① 生研支援センターが必要と認めた場合に限り、研究代表者が所属する応募者（代表機関）とは別に、生研支援センターとの委託契約業務や経理執行業務を担う機関（以下「研究管理運営機関」という。）を設置できるものとします。ただし、フェーズ3に応募する研究機関は研究管理運営機関を設置することはできません。

〔研究管理運営機関を設置できる例〕

- ・ 地方公共団体において、研究の実施に当たって事前に予算措置を要する等の特殊性を考慮し、地方公共団体に所属する研究者が研究代表者となる場合であって、かつ、地方公共団体に経理責任者を配置することが困難と認められる場合
- ・ 研究代表者が中小企業等に所属し、又は研究グループに多数の中小企業等が参画しており、生研支援センターとの委託契約の実績がほとんどないため、委託契約の締結が著しく遅延すると認められる場合

② 共同研究機関が研究管理運営機関となる場合は、3（1）③の要件を準用します。また、研究の管理運営だけを行う機関が、研究管理運営機関となる場合は、3（1）③のイからオまでに加え、次の要件を追加します。

カ 研究代表者と一体となって研究を推進することができる範囲の地域に所在する機関であること

キ 原則、生研支援センターとの委託契約の実績を有し、委託契約手続をスムーズに行うことができる能力・体制を有すること

③ なお、研究管理運営機関の設置は特例措置であることから、これを希望する場合は、研究管理運営機関を活用する理由を提案書別紙8に記載していただくとともに、応募者の経理責任者の承認を必要とします。

### （４）研究の実施体制

本プログラムを実施する研究機関又は研究グループは、以下の体制を構築する必要があります。

① 代表機関に、研究代表者（研究（企画調整を含む。）を円滑に実施するため研究実施

計画の企画立案、実施、進行管理、成果管理等を統括する者を言う。)及び経理責任者を設置すること。

なお、研究代表者は以下の要件に適合する者であることとします。委託期間中に長期出張により長期間研究が実施できない場合や人事異動、定年退職等が見込まれる場合には、研究代表者になることを避けてください。

ア 原則として応募者に常勤的に所属しており、国内に在住していること

イ 当該研究の遂行に際し、必要かつ十分な時間が確保できること

ウ 当該研究の遂行に必要な高い研究上の見識及び当該研究全体の企画調整・進行管理能力を有していること

② 共同研究機関に、研究実施責任者(共同研究機関における研究開発の責任者を言う。)及び経理責任者を設置すること。

## 4 応募手続き

### (1) 応募方法

応募に当たっては、府省共通研究開発管理システム(以下「e-Rad」という。<https://www.e-rad.go.jp/>)を使用してください(別紙1「府省共通研究開発管理システム(e-Rad)による応募手続きについて」参照)。研究グループの場合は、代表機関(研究代表者)が研究グループの研究内容をとりまとめ、応募してください。

e-Radを利用するためには、研究機関及び研究者全員の情報の登録が必要となります。なお、他省庁等が所管する制度・事業で登録済の場合は再度登録する必要はありません。(詳しくは、e-Rad担当窓口にお尋ねください。)

応募の際には、e-Rad上で所属研究機関の事務代表者による応募情報(注)の承認を受ける必要があります。応募期間内に事務代表者による承認がない場合には、応募情報は生研支援センターに提出されませんのでご注意ください。(※毎年、事務代表者の承認を忘れて応募されない事案が散見されるので注意して下さい)

その他 e-Rad を使用するに当たり必要な手続きについては、e-Rad のポータルサイトを参照してください。

(注) e-Rad では、研究代表者が入力した研究基本情報や研究組織情報、採択状況等(Web入力)と、生研支援センターが定めた提案書様式に必要な事項を記載した内容や必要な添付書類(1ファイルとしてアップロード)の内容を総称して「応募情報」といいます。

#### 【e-Rad で応募する際の注意事項】

- i) e-Rad の使用に当たっては、研究機関の登録と、研究者情報の登録が必要となります。登録には日数を要する場合がありますので、2週間以上の余裕をもって登録手続きを行ってください。
- ii) e-Rad による応募申請に当たっては、応募情報の Web 入力と応募書類の添付が必要です。
- iii) 応募書類は e-Rad にアップロードしていただきますが、アップロードできるファイルは PDF 形式で 1 ファイル(最大 20MB) ですのでご注意ください。

- iv) PDF ファイルには、パスワードを設定せず、また、文字化け等がないか必ず事前にご確認ください。
- v) e-Rad での申請情報の提出には、所属機関の事務代表者による応募情報の承認を受ける必要があります。承認がない場合は応募情報が提出されませんので、忘れずに手続きしてください。

## (2) 受付期間

**令和4年6月13日(月)～7月14日(木) 12:00まで**

システムの利用可能時間帯は、平日、休日ともに0:00～24:00です。

祝祭日であっても、上記の時間帯は利用可能です。ただし、上記利用可能時間内であっても保守・点検を行う場合、システムの運用停止を行うことがあります。

運用停止を行う場合は、ポータルサイトにて予めお知らせがあります。

## (3) 応募書類

- ① 応募書類の作成に当たっては、本公募要領に従い、別添の提案書様式にご記入ください。
- ② 応募書類は日本語で作成してください。
- ③ 提案書様式等は生研支援センターのウェブサイトよりダウンロードしてください。
- ④ 提案内容に関する秘密は厳守します。また、審査を行う評議委員にも守秘義務を課しています。
- ⑤ 応募書類は、原則として審査以外には使用しませんが、採択された研究課題に係る書類については、生研支援センターが実施する研究課題の評価及び研究により得られた成果の追跡調査等でも使用する場合があります。
- ⑥ 不採択となった研究課題に係る応募書類については、生研支援センターにおいて破棄します。なお、ご提出いただいた応募書類は返却しません。

## (4) 応募手続に関する注意事項

- ① 本プログラムの応募の締切に遅れた場合には、受け付けません。
- ② 本公募要領に示された様式以外での応募は認められません。
- ③ e-Rad を使用しない方法（郵便、ファクシミリ又は電子メール等）による応募書類の提出は受け付けません。
- ④ 提出された応募書類が応募要件を満たしていない場合、又は、応募書類に不備がある場合は、審査を受けることができません。
- ⑤ 応募受付期間終了後の応募情報ファイルの修正には応じられません。
- ⑥ 応募に要する一切の費用は、応募者において負担していただきます。
- ⑦ 次の場合には応募は無効となりますので、ご注意ください。
  - i) 応募資格を有しない者が提案書を提出した場合
  - ii) 提案書に虚偽が認められた場合
- ⑧ 研究費は可能な限り精査した額を計上してください。過大な積算を行っている研究課題については、審査上マイナスとなることがあります。

- ⑨ 採択研究課題決定の際は、審査結果を踏まえ、研究計画の見直し、研究費の減額、研究実施期間の短縮等の条件が付される場合があります。

## 5 応募に当たっての注意事項

### (1) 不合理な重複及び過度の集中の排除

提案書や e-Rad 及び他府省からの情報等により、「不合理な重複」（注1）又は「過度の集中」（注2）が認められた場合には、審査対象からの除外、採択の取消し又は経費の削減を行うことがあります。

（注1）不合理な重複とは、同一の研究者による同一の試験研究計画（プロジェクト等が配分される研究の名称及びその内容をいう。以下同じ。）に対して、複数のプロジェクト等が不必要に重ねて配分される状態であって、次のいずれかに該当する場合をいいます。

- ・ 実質的に同一（相当程度重なる場合を含む。以下同じ。）の試験研究計画について、複数のプロジェクト等に対して同時に応募があり、重複して採択された場合
- ・ 既に採択され、配分済のプロジェクト等と実質的に同一の試験研究計画について、重ねて応募があった場合
- ・ 複数の試験研究計画の間で、研究費の用途について重複がある場合
- ・ その他これらに準ずる場合

（注2）過度の集中とは、同一の研究者又は研究グループ（以下「研究者等」という。）に当該年度に配分される研究費全体が、効果的・効率的に使用できる限度を超え、その研究期間内で使い切れないほどの状態であって、次のいずれかに該当する場合をいいます。

- ・ 研究者等の能力や研究方法等に照らして、過大な研究費が配分されている場合
- ・ 当該試験研究計画に配分されるエフォート（研究者の全仕事時間に対する当該研究の実施に必要とする時間の配分割合（%））に比べ、過大な研究費が配分されている場合
- ・ 不必要に高額な研究設備の購入等を行う場合
- ・ その他これらに準ずる場合

- ① e-Rad を活用し、不合理な重複及び過度の集中の排除を行うために必要な範囲内で、応募内容の一部に関する情報を競争的研究費の府省庁担当課（独立行政法人等である配分機関を含む。以下同じ。）間で共有します。

- ② 応募時に、研究代表者・研究分担者等について、現在の他府省を含む他の競争的研究費その他の研究費の応募・受入状況（制度名、研究課題、実施期間、予算額、エフォート等）や、現在の全ての所属機関・役職（兼業や、外国の人材登用プログラムへの参加、雇用契約のない名誉教授等を含む。）に関する情報を応募書類や e-Rad に記載して

ください。

なお、応募書類や e-Rad に事実と異なる記載をした場合は、研究課題の不採択、採択取消し又は減額配分とすることがあります。

- ③ 研究費に関する情報のうち秘密保持契約等が交わされている共同研究等に関する情報については、産学連携等の活動が委縮しないよう、守秘義務を負っている者のみ、以下のとおり扱います。
- a) 応募された研究課題が研究費の不合理な重複や過度の集中にならず、研究課題の遂行に係るエフォートを適切に確保できるかどうかを確認するために必要な情報のみを提出を求めます。
  - b) ただし、既に締結済の秘密保持契約等の内容に基づき提出が困難な場合など、やむを得ない事情により提出が難しい場合は、相手機関名と受入れ研究費金額は記入せずに提出させることが可能です。なお、その場合においても必要に応じて所属機関に照会を行うことがあります。
  - c) 所属機関に加えて、配分機関や関係府省間で情報が共有されることもありますが、その際も守秘義務を負っている者のみで共有が行われます。
  - d) 今後秘密保持契約等を締結する際は、競争的研究費の応募時に、必要な情報に限り提出することがあることを前提とした内容とすることを検討していただきますようお願いいたします。ただし、秘匿性が特に高い情報であると考えられる場合等、秘匿すべき情報の範囲について契約当事者が合意している契約においては、秘匿すべき情報を提出する必要はありません。なお、必要に応じて提案者に秘密保持契約等について照会を行うことがあります。
- ④ 研究費や所属機関・役職に関する情報に加えて、寄附金等や資金以外の施設・設備等の支援を含む、自身が関与する全ての研究活動に係る透明性確保のために必要な情報については、関係規程等に基づき所属機関に適切に報告している旨の誓約を求めます。また、誓約に反し適切な報告が行われていないことが判明した場合は、研究課題の不採択、採択取消し又は減額配分することがあります。
- ⑤ 当該応募課題に使用しないが、別に従事する研究で使用している施設・設備等の受入状況に関する情報については、不合理な重複や過度な集中にならず、研究課題が十分に遂行できるかを確認する観点から、誓約に加えて、所属機関に対して、当該情報の把握・管理の状況について提出を求めることがあります。
- ⑥ 我が国の科学技術・イノベーション創出の振興のためには、オープンサイエンスを大原則とし、多様なパートナーとの国際共同研究を今後とも強力に推進していく必要があります。同時に、近年、研究活動の国際化、オープン化に伴う新たなリスクにより、開放性、透明性といった研究環境の基盤となる価値が損なわれる懸念や研究者が意図せず利益相反・責務相反に陥る危険性が指摘されており、こうした中、我が国として国際的に信頼性のある研究環境を構築することが、研究環境の基盤となる価値を守りつつ、必要な国際協力及び国際交流を進めていくために不可欠となっています。

このような状況を踏まえ、「研究活動の国際化、オープン化に伴う新たなリスクに対する研究インテグリティの確保に係る対応方針について（令和 3 年 4 月 27 日 統合イノベーション戦略推進会議決定）」を踏まえた利益相反・責務相反に関する規程が整備されていることが重要です。なお、各機関としての規程の整備状況及び情報の把握・管理の状況について、必要に応じて照会を行うことがあります。

## （２）研究倫理に関する対応

応募する研究機関の研究代表者は、応募前に研究倫理教育の研修用ビデオを視聴してください。応募提案に当たって、「研究倫理に関する誓約書」（提案書別紙 6）を提出していただきます。（詳しくは、「12 研究費の不正使用及び不正受給並びに研究活動における不正行為防止等」の（7）を参照ください）。

また、契約に当たり、代表機関及び共同研究機関は、本プログラムの研究活動に関わるすべての者を対象に研究倫理教育に関する e-ラーニングを受講するなど研究倫理教育を実施し、契約締結の際に、「研究倫理教育の実施に関する誓約書」を提出していただきます。

詳しくは、「12 研究費の不正使用及び不正受給並びに研究活動における不正行為防止等」の（4）を参照ください。

## （３）個人情報の取扱い

応募に関連して提供された個人情報については、提案者の利益の維持、「独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律」その他の観点から、採択機関の選定以外の目的に使用しません。採択機関決定後は、採択機関に係る個人情報を除き全ての個人情報を生研支援センターが責任をもって破棄します。

詳しくは、[https://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/gyoukan/kanri/kenkyu.htm](https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/gyoukan/kanri/kenkyu.htm) を御覧ください。

この法律を遵守した上で、重複応募の制限に必要な部分のみ、他の研究資金の関係各機関に対して情報提供（データの電算処理及び管理を外部の民間企業に委託して行わせるための個人情報の提供を含む。）を行うことがあります。

なお、採択された個々の試験研究計画に関する情報（試験研究計画名、研究概要、研究機関名、研究者名及び研究実施機関等）は、行政機関が保有する情報として公開されることがあります。

また、採択された試験研究計画に係る応募情報は、採択後の研究支援のために生研支援センターが使用することがあります。

応募情報に含まれる個人情報は、e-Rad を経由して、内閣府の「政府研究開発データベース」（※）へ提供されます。

### （※）政府研究開発データベース

政府研究開発データベースとは、総合科学技術・イノベーション会議が各種情報を一元的・網羅的に把握し、国の資金による研究開発の成果を適切に評価するとともに総合戦略の策定や資源配分を適切に実施できるよう、関係府省の担当者が各種情報を検索・分析するためのものです。

#### (4) 農研機構に所属する研究機関が参画する場合の支出

研究グループの構成員に農研機構の研究機関が参画する場合、当該研究機関に係る研究予算については別途予算措置をする予定です。このため、生研支援センターから当該研究機関に対し、本プログラムに係る委託費は、原則として支出しません。

## 6 審査及び採択課題の決定

### (1) 審査の方法

#### ① 一次審査（書面審査）

外部有識者による書類審査を行い、面接審査の対象とする研究課題を選定します。

PMは面接対象となる研究課題について、設定した研究開発テーマとの整合性等の意見を付します。

#### ② 二次審査（面接審査）

①で選定された研究課題について外部有識者による面接審査を行い、採択候補となる研究課題を選定します。

#### ③ 採択課題の決定

採択候補となった研究課題のうち、農林水産省に設置する本プログラムに係る運営管理委員会（以下「運営管理委員会」という。）で承認されたものについて、採択課題として決定し、当該研究課題の応募者を委託予定先とします。

採択課題の決定に当たっては、全体の予算額及び応募課題の予算額を考慮して決定されます。

審査結果を踏まえ、より適切なフェーズへの変更を含め、研究計画の見直し、研究費の減額、研究実施期間の短縮等の条件が付される場合があります。

なお、審査は非公開で行われ、審査の経過や内容等の照会には応じられませんので、御了承ください。

### (2) 審査の観点

#### ① 研究開発テーマへの適合性

ア 事業化構想は農林水産・食品分野の政策的・社会的課題の解決に資するか。

イ 現場のニーズを踏まえているか。

ウ 事業化によるインパクトが大きいか。

#### ② 技術シーズ、研究開発

ア 革新的な研究開発であるか

イ 競争優位性があるか

ウ 知財戦略に基づく競争力を確保できるか

#### ③ 事業化の内容

ア 事業内容は優位性、独自の価値を有するか

イ 見据えている市場とその規模、成長性（大きな事業機会）があるか

ウ 競争力のある知財戦略であるか

③ 計画、研究推進

- ア 研究開発の目標設定（年度、フェーズ）及び計画は適切であるか
- イ 事業化に向けた取組の目標設定（年度、フェーズ）及び計画は適切であるか
- ウ 研究開発等の実施体制及び必要経費は妥当か

**(3) 加点要素（フェーズ0のみ）**

フェーズ0（発想段階）においては、研究代表者及び研究実施責任者（共同研究機関の研究責任者）が以下のいずれかの条件を満たす研究課題については、書面審査及び面接審査の評価の際に加点します（審査上の扱いであり、採択を約するものではありません。）。

- ① 令和4年4月1日時点で39歳以下の研究者であること。

ただし、研究に従事していない期間がある者は、42歳以下であって、かつ当該期間を差し引いて39歳以下であること。

- ② 博士取得後15年以内の博士研究員（令和4年（2022年）4月1日時点で博士取得後15年以下（平成19年（2006年）4月2日以降））

**(4) 採択課題の通知・公表**

審査結果については、e-Radによる提案時に付与される課題IDを生研支援センターのウェブサイトに掲載することで速やかに公表する予定です。不採択となった提案については、不採択理由等を後日お知らせします。

**(5) 審査等に関する留意事項**

- ・応募者の企業秘密、知的財産等に係る情報等を保護する観点から、審査内容等に関する照会には応じません。
- ・委託予定先に採択された場合、速やかに試験研究計画書と共同研究機関が参画する場合はコンソーシアム設立規約等、必要な書類を作成し、提出していただきます。提出していただいた資料を基に、契約締結の可否を決定します。
- ・委託予定先に対し、必要に応じて、採択に当たっての条件、研究実施に当たっての留意事項を付す場合があります。条件、留意事項については、試験研究計画に反映して提出していただきます。条件が満たされない場合、留意事項の全部又は一部が実行できないと判断したときは、委託先としません。

**(6) 公募から委託契約までの流れ（予定）**

令和4年6月13日	公募要領の公表・公示
7月14日（12:00）	公募受付締切
7月中旬～8月上旬	一次審査（書面審査）
8月中旬～9月上旬	二次審査（面接審査）
9月中旬～下旬	採択課題（委託先）の決定・公表
10月頃	委託契約の締結

（注）スケジュールは、審査状況等により変更することがあります。

## 7 委託契約の締結

### (1) 委託契約の締結

生研支援センターは、選定された採択課題の応募者（代表機関）と委託契約を締結します。複数の研究機関が共同で応募する場合の契約に関しては、別紙2「契約等の手続について」もご参照ください。

なお、委託予定先決定から委託契約締結までの間に、委託契約先である代表機関について、特段の事情の変化があり委託契約の締結が困難と判断される場合には、委託契約の締結先を研究グループ構成員のいずれかに変更する場合があります。

また、採択通知に条件が付されている場合に、採択課題決定後に新たに作成する試験研究計画書及び委託試験研究実施計画書が当該条件を満たしていない場合は、契約は締結されません。

その他、契約時に、財務諸表等の提出を求めることがあります。

### (2) 委託期間

本プログラムの委託期間については、採択後に策定いただく試験研究計画を基に作成いただく委託試験研究実施計画書（経理様式1）を生研支援センターが受理した日から、最大2ヶ月前の日（委託試験研究実施計画書の提出日が採択通知日から2ヶ月以内の場合は、採択通知日）まで、委託期間開始日を遡ることを可能とします。

契約締結日以前であっても、委託期間開始日以降に発生する試験研究に係る経費は、委託経費として計上することが可能です。

この場合、採択通知に条件が付されている場合はこの条件に合致した研究であることが前提であり、仮に契約締結に至らなかった場合は、受託機関の自己負担となりますので、ご注意ください。

### (3) 翌年度以降の取扱い

9の(2)の評価結果等を踏まえ、研究の目標達成が著しく困難である等、研究の中止や縮小等が適当と判断された場合は、翌年度以降、試験研究計画の見直し又は中止、委託費の減額等の措置を行うことがあります。

### (4) 実績報告について

受託者は、研究実施期間の毎年度末、委託費の使用実績を取りまとめた実績報告書を作成し、証拠書類等を添えて生研支援センターに提出してください。

## 8 委託契約上支払対象となる経費

研究機関等は、生研支援センターからの委託費として、直接経費及び間接経費を計上することができます。ただし、研究管理運営業務を専門に行う研究管理運営機関は、間接経費は計上できず、代わりに一般管理費を計上することができます。

経費の詳細については、別紙3「府省共通経費取扱区分表」を御確認ください。

なお、研究目的に合致しない経費、建物等施設の建設や改修等に関する経費、法人（ベ

ンチャー企業)の立上げに要する経費などは、委託費に計上することはできませんのでご注意ください。

### (1) 直接経費

研究の遂行、研究成果の取りまとめ、普及支援に直接必要とする下記の経費を計上することができます。

- ① 物品費 (設備備品費、消耗品費)
- ② 人件費・謝金
- ③ 旅費
- ④ その他 (外注費、印刷製本費、会議費、通信運搬費、光熱水料、その他 (諸経費)、消費税相当額)

直接必要であることが経理的に明確に区分できるものに限り、

### (2) 間接経費

研究機関等が研究遂行に関連して間接的に必要とする経費であり、管理部門、研究部門、その他関連事業部門に係る施設の維持運営経費等研究の実施を支えるための経費であって、直接経費として充当すべきもの以外の経費です。直接経費の30%に相当する額を上限として計上できます。

間接経費については「競争的研究費の間接経費の執行に係る共通指針」(平成13年4月20日競争的研究費に関する関係府省連絡会申し合わせ) (※)も併せてご確認ください。

(※) [https://www8.cao.go.jp/cstp/compefund/kansetsu\\_sikkou.pdf](https://www8.cao.go.jp/cstp/compefund/kansetsu_sikkou.pdf)

### (3) 一般管理費 (研究管理運営機関に限る)

研究管理運営業務を専門に行う研究管理運営機関は、間接経費は計上できませんが、代わりに一般管理費を計上できます。一般管理費は、当該業務を遂行する上で必要となる光熱水料、通信運搬費等の管理部門の経費であって、計上に当たっては、明確な根拠を示していただくか、合理的な按分方法で算出することにより、直接経費総額の15%を上回らない範囲で必要額の計上が認められます。

### (4) 委託費計上に当たっての留意事項

① 直接経費に計上できるものは、試験研究計画の遂行及び研究成果の取りまとめに直接必要であることが経理的に明確に区分できるものに限り、特に、消耗品費、光熱水料、燃料費等を計上する場合はご注意ください。

② 人件費及び賃金は、本プログラムに直接従事した時間数等により算出されることとなりますので、本プログラムに従事する全ての研究スタッフについて、作業日誌を整備・保管することにより委託事業に係る勤務実態を把握し、十分な勤務実態の管理を行ってください (エフォート管理適用者を除く)。

なお、国及び地方公共団体からの交付金等で職員の人件費等を負担している法人については、職員の人件費は認められません (PI人件費適用者を除く)。

③ 旅費については、直接研究と関連するものとし、学会への単なる情報収集の出張は

認められません。出張内容と試験研究計画の関連を証明するため、出張伺いと出張報告書等を整備・保管してください。

- ③ 外国旅費及び外国人の招へい旅費・滞在費等の経費の支出は、原則認められません。外国へのお出張又は外国人の招へいが不可欠な場合には、その必要性や出張先を「提案書様式」の「Ⅲ－３．研究開発の内容の（２）具体的な研究開発の内容」の該当する研究内容の部分に具体的に記載してください。
- ⑤ 園芸施設や畜舎など、一般的な建物や構築物の取得は認められません。
- ⑥ 設備備品を導入する際には、購入、リース、レンタル等の手段から、委託研究経費の節減等、経済性の観点から最適なものを選択してください。選択の理由や設備備品の見積書（価格の比較が可能な資料）については、生研支援センターからの求めに応じて提出できるよう整理・保存してください。なお、採択決定後に作成する試験研究計画書における「物品導入計画」に記載がないものの購入は認められません。さらに、パソコン、デジカメ又はその周辺機器など汎用性の高い事務機器等の購入は、原則として認められませんが、本プログラムでのみ使用することを前提に、理由書の事前提出により事業遂行に必要と生研支援センターが認めた場合に限り計上可能です。
- ⑦ 特許等の本プログラムで得られた成果を権利化するために必要な経費（特許出願、出願審査請求、補正、審判等に係る経費）については、間接経費での支出が可能です。ただし、登録、維持に関わる費用は受託者負担となります。
- ⑧ パソコン、デジカメ又はその周辺機器など汎用性の高い事務機器、コピー用紙、トナー、USBメモリ、HDD、WindowsなどのOS、フラットファイル、文房具、作業着、食品用ラップ、辞書、定期刊行物など汎用性が高い消耗品については、原則として認められませんが、本プログラムでのみ使用することを前提に、当該年度で使用する最低限の必要数については認められます。必要性や購入数について、生研支援センターからの求めに応じて説明できるよう、理由書等の準備が必要になります。

## 9 研究成果の評価等

### (1) 研究成果報告書

受託者は、毎年度末及び研究終了時に研究成果報告書を作成し、生研支援センターに提出していただきます。

また、受託者は、受託研究に係る費用の使用実績を取りまとめた実績報告書を、委託期間中、毎年度末及び研究終了時に生研支援センターに提出していただきます。

### (2) 研究成果の評価等

生研支援センターは、本プログラムの実施要領及び評価要領等に基づき、毎年度、研究成果の評価を実施します。

評価結果を踏まえ、次年度の試験研究計画の見直し又は中止、委託費の減額等に反映されます。

### (3) 本プログラム終了後における報告への協力

フェーズ3が終了した研究課題は、本プログラム終了後5年間、事業化に関する状況報告をしていただきます。

### (4) 研究終了後のフォローアップ調査（追跡調査）

研究成果の社会実装の促進に役立てることを目的として、研究実施期間終了後、一定期間（2年・5年程度）を経過した研究課題を対象に、研究成果の社会実装や普及・活用状況等についてのフォローアップ調査（追跡調査）を実施します。実施に当たりましては、対象となる研究課題の研究代表者等に対応を依頼いたします。

## 10 研究成果の取扱い

### (1) 研究成果の発表等

- ① 受託者は、本プログラムの実施中、事業化方針や知的財産に注意（出願前に研究成果の内容を公表した場合、新規性が失われるため、一部例外を除き、知的財産権を取得することができなくなります。）しつつ、本プログラムにおける研究開発成果の事業化に向けて、研究協力先、法人の経営に必要な人材や事業パートナーの発掘、資金調達等を円滑に行うため、ピッチコンテストへの参加など研究成果の周知や公表に努めてください。研究成果の公表等に当たっては、事前に生研支援センターに報告していただきます。
- ② 本プログラム終了後においても、研究成果を公表するときは、あらかじめ研究実施内容等発表事前（事後）通知書を生研支援センターに提出していただきます（プログラム終了後5年間程度）。
- ③ 成果の公表に当たっては、本プログラムに係る活動又は成果であることを明記してください。  
論文の謝辞や論文投稿時においては、「論文謝辞等における研究費に係る体系的番号の記載について（令和2年1月14日競争的研究費に関する関係府省連絡会申し合わせ）」に基づき、本プログラムの体系的番号を記載いただきます。本プログラムの体系的番号は、「JPJ010717」です。
- ④ 本プログラムの研究成果について、生研支援センターは、研究成果発表会や冊子等により公表することがありますので、受託者等は資料の提供等にご協力をお願いします。

### (2) 知的財産マネジメント

「農林水産研究における知的財産に関する方針」（平成28年2月農林水産技術会議決定）に基づき、研究の開始段階においては、研究グループ内での知的財産の取扱いに関する基本的な方針について合意を得て、知的財産の基本的な取扱いに関する合意書（以下「知財合意書」という。）を作成の上、生研支援センターへ報告していただきます。また、研究成果の権利化、秘匿化、論文発表等による公知化、標準化や、実施許諾等に係る方針（以下「知的財産の取扱方針」という。）を作成の上、生研支援センターに提出していただきます。その際、研究グループ内から得られた知的財産は、研究グル

ープの構成員が自由に使用できるようにする等、研究成果を迅速に商品化・事業化につなげていけるよう、柔軟な対応を検討するよう努めていただきます。

また、研究期間中においては、知財合意書に基づき、知財運営委員会や研究の進行管理のために設置する研究推進会議等において、研究成果の権利化、秘匿化、論文発表等による公知化、標準化や、実施許諾等に関する調整等の知的財産マネジメントに取り組んでいただく必要があります。

特にフェーズ2及び3については、研究成果の事業化に当たっての「知的財産戦略」を作成していただきます。

なお、知財合意書及び知的財産の取扱方針の作成においては、研究成果の海外流出を防止する観点から適切に対応してください。

### **(3) 研究成果に係る知的財産権の帰属**

委託契約に基づく委託試験研究について、研究成果に係る知的財産権が得られた場合、日本版バイ・ドール制度（産業技術力強化法第17条）等に基づき、受託者が以下の事項の遵守を約することを条件に、生研支援センターは受託者から当該知的財産権を譲り受けませんこととしています。

※知的財産権とは、特許権、特許権を受ける権利、実用新案権、実用新案登録を受ける権利、意匠権、意匠登録を受ける権利、回路配置利用権、回路配置利用権の設定の登録を受ける権利、育成者権、品種登録を受ける権利、外国におけるこれらの権利に相当する権利、著作権及び指定されたノウハウを使用する権利をいいます。

- ① 研究成果に係る発明等を行った場合には、出願等を行う前に生研支援センターに報告すること。また、知的財産権の出願等や登録等を行った場合には、定められた期間内に生研支援センターへ報告すること。
- ② 生研支援センターが公共の利益のために当該知的財産権を必要とする場合に、生研支援センターに対して無償で実施許諾すること。
- ③ 当該知的財産権を相当期間活用していない場合に、生研支援センターの要請に基づき第三者に当該知的財産権を実施許諾すること。
- ④ 当該知的財産権の第三者への移転又は専用実施権等の設定等を行う場合は、一部の例外を除き、あらかじめ生研支援センターの承認を受けること。

なお、研究グループによる研究の場合は、必要に応じて、複数の構成員で知的財産権を共有し、その持ち分を定めることができます。詳細については、生研支援センターにお問い合わせください。

生研支援センターに提出された著作物等を成果の普及等に利用し、又は当該目的で第三者に利用させる権利については、生研支援センターに許諾していただきます。

### **(4) 知的財産権以外の研究成果の取扱い**

受託者は、知的財産権以外のものを含む全ての研究成果を研究成果報告書により、生研支援センターに報告していただきます。

受託者は知的財産権以外の研究成果について、知的財産権に準じた取扱いをすることが

必要です。

## **(5) 研究成果の管理**

受託者は、次の事項について取り組んでいただきます。

- ① 研究1年目に研究成果の知的財産としての取扱い方針（又は知財戦略）について検討し、その結果について報告していただきます。  
また、受託者は、知的財産の取扱い方針を基本としつつ、受託者が開催する研究推進会議等において、知的財産マネジメントに関して知見を有する者（民間企業における知的財産マネジメントの実務経験者、大学TLO、参画機関の知的財産部局や技術移転部局等）の助言を得ながら、知的財産マネジメントを進めていただきます。
- ② 研究成果については、日本国内の農林水産業の振興に資するよう、適切に活用していただきます。この観点から、委託契約書に基づき、当該研究成果の活用を生研支援センターから働きかける場合があります。
- ③ 研究成果に係る知的財産権の研究ライセンス及びリサーチツール特許の使用については、「大学等における政府資金を原資とする研究開発から生じた知的財産権についての研究ライセンスに関する指針」（平成18年5月23日総合科学技術会議決定）及び「ライフサイエンス分野におけるリサーチツール特許の使用の円滑化に関する指針」（平成19年3月1日総合科学技術会議決定）に基づき、対応することとなります。
- ④ 受託者である法人と、その従業員の間での知的財産権の帰属については、受託者内部の話ではありますが、受託者において職務発明規程等が整備されていない場合、委託研究における知的財産権の帰属に当たり不都合が生じますので、契約締結後速やかに職務発明規程等を整備してください。

## **(6) 研究成果に係る秘密の保持**

本プログラムに関して知り得た業務上の秘密は、契約期間の内外にかかわらず決して第三者に漏らさないでください。なお、業務上の秘密である研究成果に関する情報を、第三者（研究グループによる研究成果である場合は、研究グループ外の者）に提供する場合は、事前に生研支援センターと協議する必要があります。

## **(7) 農業者等が参画する場合の農業者等に関する情報の取扱い**

本研究開発の研究成果等の公表等に当たり、農業者等の経営に関するデータを取扱う場合は、事前にコンソーシアム構成員間でその取扱いについて取決めを行っていただく必要があります。

また、農業者等からデータの提供を受ける際には、「農業分野におけるAI・データに関する契約ガイドライン」※を踏まえて対応いただく必要があります。

※ 農業AI・データ契約ガイドラインについては、以下をご参照ください。

<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/tizai/brand/keiyaku.html>

## 1 1 本プログラムの運営管理体制

本プログラムにおいては、研究代表者等と密接な関係を維持しつつ、本プログラムの目標の達成が図られるよう運営管理を実施します。

### (1) プログラムディレクター (PD)

生研支援センターは、各研究課題の進捗管理や指導、試験研究計画の見直し又は中止の指示、及びその実施に関する督励、研究課題の予算の増減に関する権限を有する者として、PD を配置します。また、PD の業務を補佐する役割として、研究リーダーを配置します。

### (2) プログラムマネージャー (PM)

生研支援センターは、研究開発テーマの設定、研究課題の事業化支援や指導等を行う者として、プログラムマネージャー (PM) を配置します。

### (3) 評議委員会

生研支援センターは、PM の選定や事業化支援に関する PM への助言等を行う機関（事業推進）、また採択候補となる研究課題の選定、フェーズ移行を含む研究課題の評価を行う機関（研究課題の選定・評価）として、外部有識者で構成される評議委員会を設置します。

### (4) 運営管理委員会

農林水産省農林水産技術会議事務局に、スタートアップ総合支援プログラムに係る運営管理委員会設置要領（令和3年6月22日付け3農会第197号農林水産技術会議事務局長決定）に基づき、PM の選考、応募課題の審査及び採択課題の評価に関する基準の承認、PM、研究開発テーマ及び採択課題の承認、評価結果に基づく指導等の任務を担う運営管理委員会を設置します。

## 1 2 研究費の不正使用及び不正受給並びに研究活動における不正行為防止等

### (1) 研究費の不正使用等への対応について

本プログラムで実施する研究活動には、「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」（平成19年10月1日付け19農会第706号農林水産技術会議事務局長、林野庁長官及び水産庁長官通知。以下「管理・監査ガイドライン」という。）（※1）及び生研支援センターの「研究活動における不正行為に対する試験研究の中止等実施要領」（平成19年4月26日付け19生研東第18号。以下「中止等実施要領」という。）（※2）が適用されます。

各研究機関においては、管理・監査ガイドライン及び中止等実施要領に沿って、研究費の適正な運営・管理体制の整備等を行っていただく必要があります。

生研支援センターは、研究機関の研究費の適正な運営・管理体制の整備等の状況について、モニタリングを実施し、体制整備等の実施に不備がある場合は、管理条件の付与、

間接経費の削減、配分の停止の措置を講じることがあります。措置の対象は、原則として研究機関全体とします。

(※1) 管理・監査ガイドラインについては、以下のリンクをご覧ください。

<https://www.affrc.maff.go.jp/docs/misbehavior.htm>

(※2) 中止等実施要領については、以下のリンクをご覧ください。

[https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/fusei\\_taiou/index.html](https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/fusei_taiou/index.html)

## (2) 不正使用等が行われた場合の措置

本プログラム及び生研支援センターの他の事業並びに農林水産省その他の府省の事業において、研究費の不正使用又は不正受給（以下「不正使用等」という。）を行ったために、委託費等の全部又は一部を返還した研究者及びこれに共謀した研究者については、以下のとおり、当該研究費等を返還した年度の翌年度以降、一定期間、本プログラムに係る新規の応募又は継続課題への参加を認めません。

- ① 不正使用（故意若しくは重大な過失による競争的研究費資金等の他の用途への使用又は競争的研究費等の交付決定の内容やこれに附した条件に違反した使用をいう。）を行った研究者及びそれに共謀した研究者
  - ア 個人の利益を得るための私的流用が認められた場合：10年間
  - イ ア以外による場合
    - a 社会的影響が大きく、行為の悪質性も高いと判断された場合：5年間
    - b a及びc以外の場合：2～4年間
    - c 社会的影響が小さく、行為の悪質性も低いと判断された場合：1年間
- ② 不正受給（偽りその他不正な手段により競争的研究費等を受給することをいう。）を行った研究者及びそれに共謀した研究者：5年間
- ③ 不正使用等に直接関与していないが善管注意義務に違反した研究者：善管注意義務を有する研究者の義務違反の程度に応じ上限2年間、下限1年間
- ③ 農林水産省その他の府省の競争的研究費等において不正使用等を行った研究者及びそれに共謀した研究者並びに善管注意義務に違反※した研究者：当該競争的研究費等において応募又は参加を制限されることとされた期間と同一の期間

※ 善管注意義務に違反の例：原則、日常的に研究資金の管理を行うことが可能であって、研究実施に当たって管理する立場にある研究者が、競争的研究費等の使用・管理状況を把握せず、管理者としての責務を全うしなかった結果、被管理者（その他の研究者）が不正を行った場合等。

不正使用等を行った研究者及びそれに共謀した研究者並びに善管注意義務に違反した研究者が所属する研究機関に対し、研究費等の執行停止、採択決定の保留、研究費の一部又は全部の返還等の措置を講じる場合があります。

本プログラムにおいて研究費の不正使用等を行ったため、委託費の全部又は一部の返還措置が採られた場合、当該不正使用等の概要を公表するとともに、その情報を農林水

産省に提供します。また、農林水産省から競争的研究費等を所管する他の府省へ当該情報を提供することにより、他の競争的研究費等においても応募が制限される場合があります。

研究費の不正使用等が行われた場合において、その原因の一つとして研究費の不正使用等に関与した研究者等が所属する機関における公的研究費の管理・監視体制が不十分であった場合には、翌年度以降の間接経費措置額を一定割合減額する等の措置を行うことがあります。

なお、生研支援センターが公的研究費の配分先の研究機関等において不正使用等が行われた旨の情報を入手した場合の対応については、「研究機関において公的研究費の不正使用等があった場合の研究事業への参加対応について」に準じて対応します。「研究機関において公的研究費の不正使用等があった場合の研究事業への参加対応について」については、以下のリンクをご覧ください。

[https://www.affrc.maff.go.jp/docs/pdf/kenkyuhusei\\_sanka\\_taiou.pdf](https://www.affrc.maff.go.jp/docs/pdf/kenkyuhusei_sanka_taiou.pdf)

### **(3) 虚偽の申請に対する対応**

本プログラムにかかる申請内容において、虚偽行為が明らかになった場合、試験研究計画に関する委託契約の一部又は全部を取り消し、委託費の一部又は全部の返還、損害賠償等を受託者に求める場合があります。

また、これらの不正な手段により本プログラムから資金を受給した研究者及びそれに共謀した研究者等については、(2)の不正使用等を行った場合と同様の措置を採ります。

### **(4) 研究活動における不正行為への対応について**

本プログラムで実施する研究活動には、農林水産省が策定した「農林水産省所管の研究資金に係る研究活動の不正行為への対応ガイドライン」（平成18年12月15日付け18農会第1147号農林水産技術会議事務局長、林野庁長官及び水産庁長官通知。以下「不正行為ガイドライン」という。※）及び中止等実施要領が適用されます。

各研究機関においては、不正行為ガイドラインに基づいて、研究倫理教育責任者を設置するなど不正行為を未然に防止する体制を整備するとともに、研究機関内の研究活動に関わる者を対象に、委託契約締結時までに研究倫理教育を実施していただき、契約の際に「研究倫理教育の実施に関する誓約書」を提出していただく必要があります。（研究倫理教育を実施していない研究機関は本プログラムに参加することはできません）。

また、研究活動の不正行為（発表された研究成果の中に示されたデータや調査結果等の捏造、改ざん及び盗用）に関する告発等を受け付ける窓口の設置や、不正行為に関する告発があった場合の調査委員会の設置及び調査の実施等、研究活動における特定不正行為に対し適切に対応していただく必要があります。

※ 不正行為ガイドラインについては、以下のリンクをご覧ください。

<https://www.affrc.maff.go.jp/docs/misbehavior.htm>

## (5) 不正行為が行われた場合の措置

不正行為があったと認定された研究に係る資金の配分を受けた機関に対し、当該研究に配分された研究費の一部又は全部の返還を求める場合があります。

また、不正行為に関与したと認定された者及び不正行為に関与したとまでは認定されないものの、不正行為があったと認定された研究に係る論文等の内容について責任を負うものとして認定された著者に対し、以下のとおり、一定期間、本プログラムをはじめとする生研支援センターの研究資金等への申請を制限する場合があります。

- ① 不正行為に関与したと認定された者については、その特定不正行為の程度により、特定不正行為と認定された年度の翌年度以降2～10年間
- ② 不正行為に関与したとまでは認定されないものの、不正行為があったと認定された研究に係る論文等の内容について責任を負う者として認定された著者については、不正行為と認定された年度の翌年度以降1～3年間

なお、上記の措置の対象となった者の氏名・所属、当該措置の内容、不正行為の内容等を公表するとともに、農林水産省に情報提供します。また、農林水産省から競争的研究費を所管する他の府省へ当該情報を提供しますので、他の競争的研究費等においても申請が制限される場合があります。

## (6) 指名停止を受けた場合の取扱い

応募受付期間中に談合等によって農林水産省から指名停止措置を受けている研究機関等が参画した研究グループによる応募について、措置対象地域で研究を実施する内容の応募は受け付けません。なお、応募受付期間終了後、採択までの間に指名停止措置を受けた場合は、不採択とします。

## (7) 研究費の不正使用及び不正受給並びに研究活動における不正行為防止のための取組について

研究代表者は、応募に当たって生研支援センターのウェブサイトに掲載されている「事務担当者説明会動画(2020年度版)(※)」の「9 研究活動における不正行為防止のための対応」を必ずご覧のうえ、提案書別紙6の「研究倫理に関する誓約書」を提出してください。

※ 事務担当者説明会動画(2020年度版)については、以下のリンクをご覧ください。

[http://www.naro.affrc.go.jp/laboratory/brain/contents/common\\_form/index.html#yoshiki5](http://www.naro.affrc.go.jp/laboratory/brain/contents/common_form/index.html#yoshiki5)

(動画は当該ウェブサイトの「事務担当者説明資料・Q&A」に掲載されています。)

[問い合わせ受付窓口等]

生研支援センターでは、研究費の不正使用及び不正受給並びに研究活動における不正行為に関する問い合わせ受付窓口を設置しています。

(研究管理部 研究管理課 研究公正室)

電話:044-276-8487

FAX :044-276-9143

メール : kenkyuhusei@ml.affrc.go.jp

※研究費の適切な使用に向けた決意表明（別紙4）もご確認ください。

### 1 3 情報管理の適正化

#### (1) 本プログラムの実施体制

本プログラムの実施に当たって、以下の体制を確保し、これを変更する場合には、事前に生研支援センターと協議するものとします。

- ① 契約の履行に必要な情報を取り扱うにふさわしい、契約を履行する業務に従事する情報管理統括責任者又は情報管理責任者（以下「情報管理責任者等」という。）を確保すること。
- ② 情報管理責任者等が、契約の履行に必要な若しくは有用な、又は背景となる経歴、知見、資格、語学（母語及び外国語能力）、文化的背景（国籍等）、業績等を有すること。
- ③ 情報管理責任者等が他の手持ち業務等との関係において契約の履行に必要な業務所要に対応できる体制にあること。

#### (2) 情報保全

本プログラムに係る契約の履行に際し知り得た保護すべき情報（生研支援センターの業務に係る情報であって公になっていないもののうち、生研支援センター職員以外の者への漏えいが農研機構の試験研究又は業務の遂行に支障を与えるおそれがあるため、特に受託者における情報管理の徹底を図ることが必要となる情報をいう。以下同じ。）の取扱いに当たっては、別紙5「調達における情報セキュリティ基準（以下「本基準」という。）」及び別紙6「調達における情報セキュリティの確保に関する特約事項（以下「特約条項」という。）」に基づき、適切に管理するものとします。この際、特に、保護すべき情報の取扱いについては、以下の情報管理実施体制を確保し、これを変更した場合には、遅滞なく生研支援センターに通知するものとします。

- ① 契約を履行する一環として受託者が収集、整理、作成等した一切の情報が、生研支援センターが保護を要しないと確認するまでは保護すべき情報として取り扱われることを保障する実施体制
- ② 生研支援センターの同意を得て指定した取扱者以外の者に取り扱わせないことを保障する実施体制
- ③ 生研支援センターが書面により個別に許可した場合を除き、受託者に係る親会社等（本基準第2項第14号に規定する「親会社等」をいう。）、兄弟会社（本基準第2項第15号に規定する「兄弟会社」をいう。）、地域統括会社、ブランド・ライセンサー、フランチャイザー、コンサルタントその他の受託者に対して指導、監督、業務支援、助言、監査等を行う者を含む一切の受託者以外の者に対して伝達又は漏えいされないことを保障する実施体制

#### (3) 応募者に要求される事項

- ① 応募者は、本基準、公募要領及び特約条項を了知の上、応募するものとします。

② 応募者は、(1)及び(2)の事項を踏まえて、提案書別紙4「情報管理実施体制」を記載してください。

また、本基準の項目5から12については、契約締結時までにはコンソーシアム規約若しくは社内規則に当該項目を規定してその写しを提出する又は当該項目を遵守する旨を記載した誓約書を提出していただく必要があります。

なお、応募者は、提出した資料に関し、説明、質問への回答、追加資料の提出、生研支援センターとの協議等に応じる義務を負うものとし、必要な体制整備等がなされていないと判断された場合は不採択となりますので、ご注意ください。

## 1.4 委託業務の実施に当たっての留意事項

### (1) 購入機器等の帰属及び管理

受託者(研究グループにより試験研究計画を実施する場合は、研究グループを構成する全機関をいう。以下同じ。)が委託契約に基づき「購入した機器類等の物品」の所有権は、委託研究の実施期間中は受託者に帰属します。受託者には、委託研究の実施期間中、善良なる管理者の注意をもってこれらの機器類等の物品を管理していただきます。委託事業終了後の取扱いについては、別途、生研支援センターへの返還の要否をお知らせすることとしています。

また、購入した機器類等の物品については、本プログラムの購入機器である旨、管理簿に登録した上で、物品にシールを貼るなどして明示してください。

委託契約に基づいて製作した試作品については、試作品本体や看板等への標示により、本プログラムによって製作した旨を明記してください。

なお、農研機構に所属する研究機関が研究グループに参画する場合、当該研究機関に係る研究予算については別途予算措置をする予定であることから、当該研究機関が購入した機器等の帰属に係る手続きは、本公募要領に記載する内容にはよらない手続きを行うこととなります。

### (2) 安全保障貿易管理について(海外への技術漏洩への対処)

我が国では、国際的な平和及び安全の維持を目的に、外国為替及び外国貿易法(以下「外為法」という。)に基づき輸出管理(※1)を実施しています。外為法で規制されている貨物の輸出や外国への技術提供を行おうとする場合、事前に経済産業大臣の許可を受ける必要があります。このため、本プログラムにおいて、貨物の輸出や技術の外国への提供を予定している場合には、その貨物又は技術の確認を(また、要する場合には許可申請を)お願いします。

(※1) 我が国の安全保障輸出管理制度は、国際合意等に基づき、主に①輸出貿易管理令別表第1及び外為令別表第1に記載の品目のうち一定以上のスペック・機能を持つ貨物(技術)を輸出(提供)しようとする場合に、経済産業大臣の許可が必要となる制度(リスト規制)と、②リスト規制に該当しない貨物(技術)を輸出(提供)しようとする場合で、軍事転用されるおそれがある場合(用途要件・需要者要件又はインフォーム要件を満たした場合)に、経済産業大臣の許可を必

要とする制度（キャッチオール規制）から成り立っています。

貨物の輸出だけでなく技術提供も外為法の規制対象です。リスト規制技術を国外に提供する場合や、国内であっても非居住者等（特定類型（※2）に該当する居住者を含む。）に提供する場合には、事前の許可が必要です。技術提供には、設計図・仕様書・マニュアル・試料・試作品などの技術情報を、紙・メール・DVD・USB メモリなどの記録媒体で提供することはもちろんのこと、技術指導や技能訓練などを通じた技術支援、セミナーでの知識の提供なども含まれます。外国からの留学生や研究者の受入れや、共同研究等の活動の中にも規制対象となる技術提供が含まれている場合がありますので注意が必要です。

（※2）「外国為替及び外国貿易法第 25 条第 1 項及び外国為替令第 17 条第 2 項の規定に基づき許可を要する技術を提供する取引又は行為について」1. (3)サ①～③に規定する特定類型を指します。

また、外為法に基づき、リスト規制貨物の輸出又はリスト規制技術の外国への提供を業として行う場合には、安全保障貿易管理の体制構築を行う必要があります（※3）。このため、本プログラムにより取得したリスト規制貨物の輸出又はリスト規制技術の外国への提供を予定している場合又はその意思を有する場合、安全保障貿易管理体制の整備をお願いします。万が一、外国へのリスト規制技術の提供を予定している又はその意思がある場合であって、安全保障貿易管理体制を整備していない場合には、本研究実施期間中又は技術提供・輸出を行うまでに体制整備をお願いします。

（※3）輸出者等は外為法第 55 条の 10 第 1 項に規定する「輸出者等遵守基準」を遵守する義務があります。また、ここでの安全保障貿易管理体制とは、「輸出者等遵守基準」にある管理体制を基本とし、リスト規制貨物の輸出又はリスト規制技術の外国への提供を適切に行うことで未然に不正輸出等を防ぐための、組織の内部管理体制を言います。

（参考）安全保障貿易管理の詳細は、以下のガイダンス等をご覧ください。

- 安全保障貿易管理（全般）：<https://www.meti.go.jp/policy/ampo/>
- Q&A：<https://www.meti.go.jp/policy/ampo/qanda.html>
- 安全保障貿易に係る機微技術管理ガイダンス（大学・研究機関用）：  
[https://www.meti.go.jp/policy/ampo/law\\_document/tutatu/t07sonota/t07sonota\\_jishukanri03.pdf](https://www.meti.go.jp/policy/ampo/law_document/tutatu/t07sonota/t07sonota_jishukanri03.pdf)
- 大学・研究機関のためのモデル安全保障貿易管理規程マニュアル：  
<https://www.meti.go.jp/policy/ampo/daigaku/manual.pdf>

※企業向けは一般財団法人安全保障貿易管理センターのモデル CP も参照ください。

<https://www.cistec.or.jp/export/jisyukanri/modelcp/modelcp.html>

- 安全保障貿易ガイダンス（入門編）

<https://www.meti.go.jp/policy/ampo/guidance.html>

- 大学・研究機関向け、及び中小企業等向けの説明会、アドバイザー派遣等事業  
(大学・研究機関向け) <https://www.meti.go.jp/policy/ampo/daigaku.html>  
(中小企業等向け) <https://www.meti.go.jp/policy/ampo/chusho.html>

### (3) 動物実験等に関する対応

動物実験については、「農林水産省の所管する研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針」(平成18年6月1日付け農林水産技術会議事務局長通知)(※)に定められた動物種を用いて動物実験等を実施する場合は、当該基本指針及び当該基本指針に示されている関係法令等に基づき、適正な実施をお願いします。

(※) [https://www.maff.go.jp/j/kokuji\\_tuti/tuti/t0000775.html](https://www.maff.go.jp/j/kokuji_tuti/tuti/t0000775.html)

### (4) 海外の遺伝資源の取得・利用等を含む研究に関する対応

海外遺伝資源の取得又は利用を含む研究については、生物多様性条約、名古屋議定書、食料・農業植物遺伝資源条約(ITPGR)、遺伝資源提供国の法令及び我が国の国内措置(ABS指針)(※)等に基づき、適正に実施していただく必要があります。

(※) <http://abs.env.go.jp/consideration.html>

### (5) 農業者等からデータを受領・保管する際の取り決めについて

データは多くの場合、データそれ自体ではなく、加工・分析等を行い、利用することで初めて価値が創出されます。他方、データは容易に複製することができ、適切な管理体制がなければ不正アクセスにより外部に流出され得るものであることから、データにノウハウ等が含まれている場合、競合産地に流出してしまうという不安からデータの提供を躊躇することもありえます。

農林水産省では、知的財産である農業ノウハウの保護とデータの利活用促進の調和を図ることで、農業者等が安心してデータを提供できるよう、「農業分野におけるAI・データに関する契約ガイドライン～農業分野のデータ利活用促進とノウハウ保護のために～」(令和2年3月 農林水産省。以下「農業AI・データ契約ガイドライン」という。)(※)を策定しています。本ガイドラインは、農業以外の産業向けの「AI・データの利用に関する契約ガイドライン」(令和元年12月 経済産業省)と法的整合を図りつつ、農業分野の特殊性を踏まえ、データ・成果物等の利用権限や管理方法等について契約のひな形や考え方等を示しています。

受託者は、本プログラムで実施する研究活動において農業者等からデータを受領・保管する際には、農業AI・データ契約ガイドラインに準拠し取り決めておくべき事項について当該農業者等と合意を行っていただくこと(データの取得がスマート農機等の利用による場合には、そのシステムサービスの利用規約等が農業AI・データ契約ガイドラインの内容に沿っていること)が必要であり、その内容は実績報告の対象となります。別紙7「AI・データ契約ガイドライン準拠チェックリスト」をご参照ください。

農業者等以外からデータを受領・保管する場合は準拠の必要はありませんが、農業AI・データ契約ガイドラインも参考に、データ等の利用や適切な利益配分のほか、農業者等による事前の承諾無く目的外利用や第三者に提供しないこと等について取り決める

ことを検討して下さい。

(※) 農業 AI・データ契約ガイドラインについては以下を参照。また、以下 URL 内に合意に係る契約のひな形も掲載されていますので適宜御活用ください。

<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/tizai/brand/keiyaku.html>

## (6) データマネジメントに関する対応

生研支援センターから、研究事業の目的、対象等を踏まえ、データマネジメントに係る基本的な方針（以下「データ方針」という。）をお示しします。（別紙 8 を参照）

示された「データ方針」に基づき、委託契約書の締結までに、研究開発データの管理についてデータマネジメントプランを作成していただきます（受託者がコンソーシアムである場合は、コンソーシアムの構成員間でその取扱いについて合意した上でデータマネジメントプランを作成してください。）。契約締結後、当該データマネジメントプランに従って、研究開発データの管理を行っていただきます。

応募者は、データ方針を踏まえて提案書別紙 6 のデータマネジメント企画書を記載してください。

## (7) 若手研究者の自発的な研究活動の支援

「統合イノベーション戦略 2019」（令和元年 6 月 21 日閣議決定）や「研究力強化・若手研究者支援総合パッケージ」（令和 2 年 1 月 23 日総合科学技術・イノベーション会議決定）に基づき、「競争的研究費においてプロジェクトの実施のために雇用される若手研究者の自発的な研究活動等に関する実施方針」（令和 2 年 2 月 12 日付け競争的研究費に関する関係府省連絡会申し合わせ）が策定されたことを踏まえ、若手研究者の育成・活躍機会の創出及びキャリアパスの形成のため、本プログラムにおいてプロジェクトの実施のために雇用される民間企業を除く研究機関に所属する若手研究者について、所属研究機関からの承認が得られた場合、雇用されているプロジェクトから人件費を支出しつつ、当該プロジェクトに従事するエフォートの一部を自発的な研究活動等に充当することを可能とします。研究代表者は若手研究者の自発的な研究活動等を積極的に支援していただきます。所属研究機関において、若手研究者による自発的な研究活動等の実施が承認された場合は、当該プロジェクト計画等に記載していただきます。

詳しくは、下記リンク「委託業務研究実施要領～事務処理関係編～」（令和 4 年 4 月生物系特定産業技術研究支援センター）の「II 契約事務関係」の「14. 若手研究者の自発的な研究活動」をご覧ください。

[https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/R04SOP\\_Integrated\\_ver1.1.pdf](https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/R04SOP_Integrated_ver1.1.pdf)

## (8) エフォート管理の統一

各資金配分機関から求められるエフォート管理に係る手続や提出書類が異なることで、研究者及び研究機関に事務負担が生じております。このため、統合イノベーション戦略 2019（令和元年 6 月 21 日閣議決定）においても、「資金配分機関ごとに異なるエフォートの管理の共通化を図る」ことが示されております。

このような状況を踏まえ、資金配分機関が所管する競争的研究費の各制度においてエ

フォートの申告、状況確認、報告に係る標準的な手続を設定するとともに、研究機関が保管・提出すべき書類を統一することにより、エフォート管理に関する手続の簡素化及び合理化を実現し、エフォート管理の拡大を推進します。

詳しくは、下記リンク「委託業務研究実施要領～事務処理関係編～」(令和4年4月生物系特定産業技術研究支援センター)の「II 契約事務関係」の「15. エフォート管理」をご覧ください。

[https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/R04SOP\\_Integrated\\_ver1.1.pdf](https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/R04SOP_Integrated_ver1.1.pdf)

#### **(9) 複数の研究費制度による共用設備の購入(合算使用)**

競争的研究費の各制度における研究費の合算使用は、これまで一部の競争的研究費制度で可能とされてきましたが、「複数の研究費制度による共用設備の購入について(合算使用)」(令和2年3月31日付け資金配分機関及び所管関係府省申合せ)により、各制度で実施する研究目的の達成と、更なる研究資金の効果的・効率的な活用の観点から、購入した設備の所有権が研究機関に帰属することを前提に、複数制度の研究費の合算により各制度の目的に則した共用設備を購入することを可能とする研究費制度が拡大されたところです。

本プログラムにおいても、研究機関(研究者)が資金配分機関における競争的研究費の複数制度で共同して利用する設備を購入する場合、複数制度の研究費の合算による購入を可能とします。

なお、合算による共用設備の購入が可能な研究機関種別については、大学等(国立大学法人、大学利用機関法人、公立大学、私立大学、高等専門学校)、国立研究開発法人、地方公共団体及び公益法人を対象とします。

詳しくは、下記リンク「委託業務研究実施要領～事務処理関係編～」(令和4年4月生物系特定産業技術研究支援センター)の「II 契約事務関係」の「4. 委託費により取得した物品の取扱い」の「(9) 複数の研究費制度による共用設備の購入(合算使用)」をご覧ください。

[https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/R04SOP\\_Integrated\\_ver1.1.pdf](https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/R04SOP_Integrated_ver1.1.pdf)

#### **(10) 競争的研究費の直接経費から研究代表者等(P I)の人件費の支出**

統合イノベーション戦略2019(令和元年6月21日閣議決定)においては、競争的研究費の直接経費から研究代表者及び研究実施責任者(以下「P I」という。)本人の人件費の支出を可能にし、研究機関の裁量により、研究者支援に活用可能な経費を拡大することが提言され、研究機関において適切に執行される体制の構築を前提として、研究活動に従事するエフォートに応じ、P I本人の希望により、直接経費から人件費を支出することを可能としました。これにより研究機関は、P Iの人件費として支出していた財源を、P I自身の処遇改善や、研究に集中できる環境整備等によるP Iの研究パフォーマンス向上、多様かつ優秀な人材の確保等を通じた機関の研究力強化に資する取組に活用することができ、研究者及び研究機関双方の研究力の向上が期待されます。

その際、各研究機関におけるガバナンスの強化や、意欲ある若手をはじめ優秀な研究者を厚遇する人事給与マネジメントの改善等と一体的に実施されることで、一定の新陳代謝を維持しつつ優れた研究者が活躍できる好循環の実現により、研究成果の持続化・

最大化が期待されます。

詳しくは、下記リンク「委託業務研究実施要領～事務処理関係編～」(令和4年4月生物系特定産業技術研究支援センター)の「II 契約事務関係」の「16. 競争的研究費の直接経費から研究代表者の人件費の支出について」をご覧ください。

[https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/R04SOP\\_Integrated\\_ver1.1.pdf](https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/R04SOP_Integrated_ver1.1.pdf)

#### **(11) 競争的研究費の直接経費から研究以外の業務の代行に係る経費を支出可能とする見直し(バイアウト制度の導入)**

優れた研究成果の創出に当たっては、研究者が研究に専念できる研究環境が不可欠であるが、研究者の研究に充てる時間割合は減少傾向であり、研究に従事できる時間の確保が急務です。

統合イノベーション戦略2019(令和元年6月21日閣議決定)においては、我が国の研究力向上に向け、研究者の研究時間の確保のための制度改善を行うよう方向性が示されています。

このため、競争的研究費の直接経費の用途を拡大し、PI本人の希望により研究機関と合意をすることで、その者が担っている業務のうち研究以外の業務(講義等の教育活動等やそれに付随する事務等。なお、「研究」には、当該競争的研究費により実施される研究以外の研究も含む。)の代行に係る経費の支出を可能とする制度(「バイアウト制度」)を導入することとします。これにより、研究プロジェクトに専念できる時間の拡充が可能となり、当該研究プロジェクトの一層の進展が期待されます。

詳しくは、下記リンク「委託業務研究実施要領～事務処理関係編～」(令和4年4月生物系特定産業技術研究支援センター)の「II 契約事務関係」の「17. 競争的研究費の直接経費から研究以外の業務の代行経費を支出可能とする見直し(バイアウト制度の導入)について」をご覧ください。

[https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/R04SOP\\_Integrated\\_ver1.1.pdf](https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/contents/R04SOP_Integrated_ver1.1.pdf)

#### **(12) 競争的研究費におけるRA経費等の適正な支出の促進について**

生研支援センターでは、科学技術・イノベーション基本計画(令和3年3月26日閣議決定)における推進方策を踏まえ、博士課程(後期)学生をRA(リサーチアシスタント)として雇用し、その際の給与水準について、経済的支援を充実すべく、博士後期課程在籍学生の約3割が生活費相当程度と受給できることを推奨します。

研究の遂行に必要な博士課程学生を積極的にRA等として雇用するとともに、業務の性質や内容に見合った単価を設定し、適切な勤務管理の下、業務に従事した時間に応じた給与を支払うこととしてください。

### **15 その他の留意事項**

#### **(1) 利益相反・責務相反に関する規定の整備**

応募者においては「研究活動の国際化、オープン化に伴う新たなリスクに対する研究インテグリティの確保に係る対応方針について」(令和3年4月27日 統合イノベ

ーション戦略推進会議決定) (※)を踏まえた利益相反・責務相反に関する規程の整備が重要です。

このため、応募者の規程の整備状況及び情報の把握・管理の状況を確認するため、必要に応じて応募者に照会を行うことがあります。

(※) [https://www8.cao.go.jp/cstp/kokusaiteki/integrity/integrity\\_housin.pdf](https://www8.cao.go.jp/cstp/kokusaiteki/integrity/integrity_housin.pdf)

## (2) 「国民との科学・技術対話」の推進

平成22年6月19日付けで科学技術政策担当大臣及び総合科学技術会議有識者議員により策定された「「国民との科学・技術対話」の推進について(基本的取組方針)」(※)に基づき、当面、1件当たり年間3千万円以上の公的研究費の配分を受ける研究者等は、研究活動の内容や成果を社会・国民に対して分かりやすく説明する、双方向のコミュニケーション活動に積極的に取り組んでいただく必要があります。

(※) [https://www8.cao.go.jp/cstp/stsonota/taiwa/taiwa\\_honbun.pdf](https://www8.cao.go.jp/cstp/stsonota/taiwa/taiwa_honbun.pdf)

## 16 問合せ先

本件に関する問合せは、応募の締切りまでの間、以下において受け付けます。なお、審査経過、他の提案者に関する事項、応募に当たり特定の者にのみ有利となる事項等にはお答えできません。また、これら以外の問合せについては、質問者が特定される情報等を伏せた上で、質問及び回答の内容を生研支援センターのウェブサイトにて公開させていただきますので、御承知おきください。

### ○ 公募全般に関するお問い合わせ

事業推進部スタートアップ支援課 担当：山木、江川、木村

E-mail : [brain-stupweb@ml.affrc.go.jp](mailto:brain-stupweb@ml.affrc.go.jp)

### ○ 契約事務について

研究管理部研究管理課 担当：上北、山口

E-mail : [brain-jimu@ml.affrc.go.jp](mailto:brain-jimu@ml.affrc.go.jp)

### ○ 研究費の不正使用及び不正受給並びに研究活動における不正行為について

研究管理部 研究管理課 研究公正室

E-mail : [kenkyuhusei@ml.affrc.go.jp](mailto:kenkyuhusei@ml.affrc.go.jp)

(注意) お問い合わせは、原則、メールでのみ承ります。ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

### ○ e-Rad について

e-Rad ヘルプデスク

TEL : 0570-057-060

03-6631-0622 (直通)

「府省共通研究開発管理システム(e-Rad)」ポータルサイトの「ヘルプデスク お問い合わせ」も御確認ください。( <https://www.e-rad.go.jp/contact.html> )